

石川県立工業高等学校

学級数：24学級 生徒数：898人

【テーマ】

「がん」と共生していく上での生活の質について考える。

1 はじめに

本校では、保健体育科の「保健」の授業を中心にがん教育を行ってきた。保健では生活習慣病について広く取り扱っているが、「がん」だけに焦点を当てる単元もあり、がんについて深く学習を行っている。

生徒たちへの事前アンケートでは、小・中学校での「がん」への知識が身につけていることがわかるが、「がんになっても生活の質を高めることができるか」の項目で否定的な意見がしばしば見られ、肯定側の理由も聞いてみると「なんとなく」や「よくわからない」という様子であった。

これらのことから、本実践のテーマを「がんになっても生活の質を高めることができるのか」とし、がんに対する正しい知識を身につけるだけでなく、外部講師の方が実際に経験されてきた話を通じて、がんと共生していくことについて考えるとともに、現在の自分の考え方や生き方に活かすことができるように実践した。

2 実践

(1) 科目（保健）における基礎知識の定着

本単元を4時間構成とし、1,2時間目で生活習慣病の予防やがんに対する基礎知識を身につけた。3時間目にはがんの治療と回復について学ぶとともに、外部講師として、「はなうめ」の橋典孝氏をお招きし、本単元の山場となる「がんになっても生活の質を高めることは可能か？」についての学習を深めるきっかけとなるお話をし

ていただいた。

4時間目ではこれまでの学習したことや、前時の外部講師のお話を通じて考えたことを踏まえて、がんに対する社会的な対策について学習した。また最後に本単元を通じて学んだことや考えたことを用いて、がん患者や病への理解と共生のためにどのようなことが大切かをまとめ、共有した。

(2) がん経験者とのT・Tによる授業

指導案検討会では生徒の実態について共通理解をはかるとともに、講師の方の経験や伝えたいことなど教員と講師の共通認識を取った上で検討を進めた。授業の形としてはT・Tであるが、基本は教員が授業進行を行い、エピソードトークやそれに対する生徒の反応にコメントすることを講師の方をお願いした。検討会後も連絡を取り、授業で話していただく内容や時間の検討や、生徒から事前に集めた質問に対する回答の準備をした。



授業では、講師の方に経験談を話していただいたことに対して、生徒たちの率直な感想や考えをmentimeterで即時共有したり、ワークシートに書き出したりした。授業の始め

と終わりに本時の課題である「がんになっても生活の質を高めることはできるのか」を問いかけたが、生徒の回答は始めと終わりでは全体的に肯定的な意見となり、講師の方のメッセージが伝わっているとわかる内容になっていた。



講師の方の経験談を聞いた生徒たちは、意見や考えの共有をしながら、本時のテーマとなるがん患者の生活の質についてだけでなく、現在の自身の生き方や考え方についても見つめるきっかけとなった。

(3) 生徒の感想

○講師の方が実際にがんになったリアルな経験談を聞いた感想

- ・がんは身体的な面でも精神的な面でも苦しいことがすごく伝わった。
- ・がん検診に行かなければ、症状が出てからでは本当に手遅れなのが怖いと思った。
- ・がんは体へのダメージや負担よりも心へのダメージや負担の方が大きいと感じた。
- ・がんになると精神的なショックから生活の質は大きく下がってしまうと感じた。

○講師の方の現在の生き方、考え方を聞いた感想

- ・理想の自分でないといけないと思うと自分を苦しめることになる。今の自分を素直に受け止めて新たな視点を持つことが大切だと感じた。
- ・自分の生きたいように生きることはがんになってもならなくても難しい。

- ・過去と現在の自分としっかり向き合い、新たな一步を踏み出すことを普通に話していたが、そこまで多くの時間と苦勞がかかっているはずだと思った。
- ・過去にとらわれず、現在の自分を見つめて、視点や考え方を変えるととはとても大切なことなんだなと感じた。

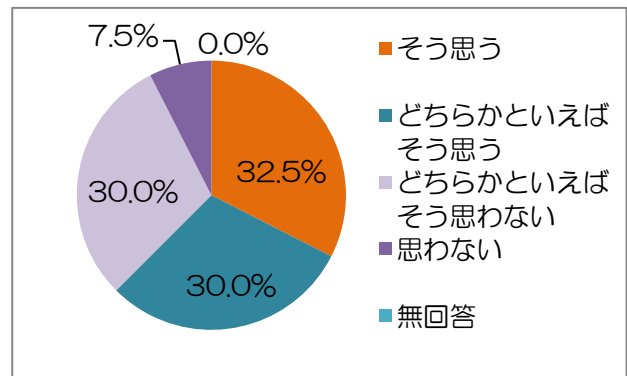
○本時を通した感想

- ・がんになってしまったら生活の質は絶対落ちると思っていたが、考え方や意識で生活の質を高めることはできると感じた。
- ・がんになって元通りの自分を目指さなくても今の自分にとってより良い生き方をすることができれば生活の質は高められると思った。
- ・1つの考え方にこだわらなくても、自分の視点や意識を変えるだけで、自分の人生をより充実させることができる。

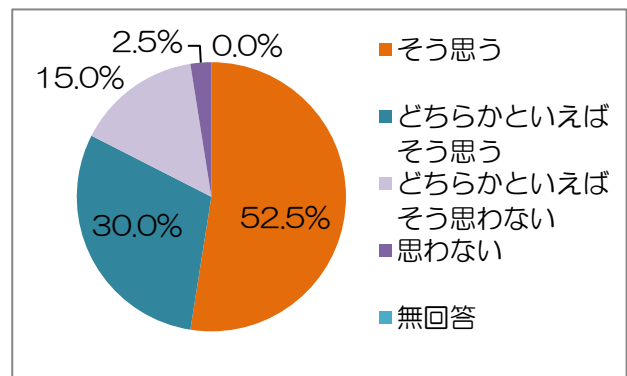
3 生徒アンケートの結果

【実施前】

がんになっても生活の質を高めることができる



【実施後】



授業前後のアンケート結果を比較すると、「そう思う」の回答が32.5%から52.5%と変化し20%増加している。「どちらかと言えばそう思う」の回答は数字の変化はなかった。この質問に対する肯定的な意見（そう思う、どちらかと言えばそう思うの合計）は、授業後で82.5%となっている。

これらの結果から、本時を通してクラス内の80%以上に肯定的な変化があったことがわかる。授業での教科書や教師の解説、動画教材だけでは、がん患者の素の実態について生徒たちも十分に感じ取ることができずにいたが、外部講師の方のリアルな実態のお話を受けて生徒たちの考えに大きく影響があったと考えられる。

4 実践の成果と課題

〇〇成果〇〇

講師の方のお話を聞くだけでなく、その授業でその瞬間でしか感じることをできない考えや思いを、chromebookを活用しクラス内で共有しながら授業を進めたことで、生徒の思考を深めるねらいがうまくいったと感じている。生徒たちはmentimeterで投稿する際やワークシートに記入する際に、何度も書き直す様子があった。難しい内容を取り扱ったため生徒の思考が止まってしまうことも予測していたが、講師の方のリアルな経験談は、教科書や動画等の教材では感じることを出来ない、身近な経験として捉えることができたからだと考える。

今回の授業の形は、生徒たちの感じたことや意見を大切にしながら進めてく形式であったため、教師側のアドリブ力が求められる難しさがあった。外部講師の方は、説明することやお話されることに慣れている方であったため非常に助けていただいた。2人で生徒の意見や考えを拾って、クラス全体に共有し、生徒たちの思考をより深めることができた。授業後回収したのワークシートの感想では、

今の自分の生き方を見つめていることがわかる記述もしばしば見られた。

◆◆課題◆◆

今回、外部講師をお招きした授業実践の成果もあり、生徒たちはがんに関して非常に有意義な学びの時間となった。今後も学校単位で継続することを考えると、授業準備の負担を軽減できなければ、実現が困難であると考ええる。外部講師の派遣・連絡・協議会を通じてようやく本番を迎えるため、本番までの準備には教員の時間と労力を要する。また学校の時間割（本校は1学年8クラス分）に外部講師の都合を合わせていただくことや、クラスに応じて内容を変化させることも実践を継続する難しさとなる。

しかし、がん教育は今後の生徒の人生、そして日本社会においても非常に大切な内容であり、外部講師と協力した授業は、生徒たちにとって学びや思考をより深めるために非常に効果的であると考ええる。現在残っている課題点を少しでも解消し、学校単位でのがん教育における外部講師との連携授業が推進されることを望む。